

す、といはんも、よのつねなり、

松風のはゝきにちりをはらはせてにはふみてらの花のしやくやく

海上月

稼

堂

つくしぢの雲はれわたるさゝらがた今かさすらんさゝらえをとこ  
狩野季信の書をフアーデル氏とどやうくさだしける  
よしあしのこゝろはねなし難波江の西と東のかたかはるとも

新竹

生さきの恐るへきかなぬきいづる一夜見ぬまの窓のくれ竹

謠曲の夜打替我

一筋のこゝろはなぞかたゆむべきちすぢの繩の身にかゝるとも

この頃、歌三つ咏みて、題名を求めたれど、

得ねば其まゝにす

溪川學人

あら熊の越ゆる小木曾の山中に我住みなんかたゝひとりして  
を歌みたにせさりし夜への雨は晴れて有明の月に鴈なきわたる  
大丈夫かきのふ狩りせし山のへにひとむら雲のたなひきにけり

社頭五月雨

松露生

河の邊の若葉の杜に月影をいつか待めんさみたれのそら

夏 山

さみたれの晴間の山の窓近きぬるゝは雲のすたくなりけり

歸 休 兵

草枕結ひしころもときすてゝ歸るやいかに嬉しうらん

樹 蔭 納 涼

江 楠 生

風さよく奈良の木蔭に立寄れば夏をよそなる袖の涼しさ

水 鶏

そこどなく澤邊をくれば夕まくれまこも隠れにくひな鳴くなり

夏 月

庭草のつゆに宿れる月見れば秋の夜いそぐかけの冴けさ

寄 夏 祝

大君の恵みの露に夏草の茂りあひゆく御代にもあるかな

偶 成

天津日の光かしこみ醜草のきのふにも似ぬ色そみえける

騎兵の曙は歌

巴城生譯

茜さす

朝日のひかりに

わが生命

消え果つべきか

うちひい

ラッパの聲と

もろともに

我ら多くの

武夫は

世をぞ去るべき

いざ去らむ

昨日まで

誇れる駒に

むちうちて

はありしことも

何かせむ

今日は矢玉に

胸うたれ

明日は草葉の

つゆなれや

つくすたのしみ

つきせねど

うるはしき

姿もやがて

消ゆべきぞ

花くれなゐに

そめなせる

なれがほこりの

顔せも

はこるべきかは

ささ匂ふ

薔薇も一度は

凋むなり

さればいざ

神のみむねに

任せつゝ

いといさぎよき

うち死を

とげて騎兵の

いさましき

譽をのちに

傳えなむ

たけく戦へ

ますらをよ

論歌謠之德

秋月胤繼

人生而有性、有性而有情、情之接物而生也、爲喜、爲怒、爲哀、爲愉快、爲怨恨、爲思慕、爲無聊、